◇ 国　語

国 4－1～国 4－20 まで 20 ページあります。

第一問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

一九九九年一〇月、ドイツの詩人クリストフ・ホイプナーを通じて、国際アウシュビッツ委員会から強制収容所跡の見学に招待されました。アウシュビッツ青年集会所を宿舎とし、数日かけての見学ということでした。この集会所は、アウシュビッツ第一収容所と、そこから二マイル先のビルケナウ死の収容所の中間にあります。二つの収容所跡を案内してもらい、非公式ながら三人の生存者の方々と面会しました。そのとき、私たち世代の成長過程にまで影を落としつづけた暗黒の力の中核に、確かに――少なくとも地理的に――近づいたことを感じました。雨の午後に訪れたビルケナウのガス室跡は、瓦礫化していました。赤軍から逃げようとしてドイツ軍がここを爆破したままに――ほとんどそのままに――残されているそうです。手入れもなく放置されている様が不思議でした。いまでは湿り気を帯びたコンクリート片の山となり、ポーランドの厳しい気候にさらされて、年々朽ちていっています。招待者の方々は、ジレンマを抱えていると話してくれました。風防ガラスのドームで覆い、後世の目にも触れるよう残すべきなのか、それとも自然に、徐々に、朽ち果てていくのに任せるべきなのか。(1)私には、その悩みがもっと大きなジレンマの暗喩のように聞こえました。こうした記憶はどう保存すべきなのか。ガラスのドームで覆うことで、悪と苦痛のA イブツが博物館の穏やかな展示物に変わってしまうのか。私たちは何を記憶するかをどう選択したらいいのか。忘れて先へ進んだほうがいいと、いつ言えるのか……。

私は四四歳でした。そのときまで、第二次世界大戦というものは、数々の恐怖や勝利の話ともども両親の世代のこと、と考えていました。［　ア　］、いま、この巨大な出来事をじかに体験した人々が遠からずいなくなる、と思い当たりました。そのあとはどうなるのだろう。記憶しておくというB セキムが、私たちの世代に引き継がれるのだろうか。私たち自身は戦争の年月を体験していませんが、その私たちを育てた両親の世代は、否応なく人生に戦争を刻み込まれています。物語を公に語る者である私は、いままで気づかずにいたけれど、そのセキムを引き継ぐ立場にあるのではないか。両親の世代の記憶と教訓を、できるだけ力を尽くして、次に来る世代に伝える義務があるのではないか……。

その後しばらくして、東京で講演をする機会がありました。集まった人々の中から、次はどんな作品を？　という質問が出ました。よくある質問です。しかし、この方の質問は、もう少し詳しく言うとこんな具合でした。まず、私の小説には、社会的・政治的に大きな混乱の時期を生きた人の物語が多いと指摘し、その人物は自分の人生を振り返り、暗く恥ずべき記憶となんとか折り合いをつけようとする、と前置きして、これからもそういう物語を書いていくのですか、と尋ねました。

私の答えは、自分でもまったく思いがけないものでした。はい、と答えました。これまで、忘れることと記憶することの間で葛藤する個人を書いてきたが、これからは、国家や共同体がこの問題にどう向き合うかをテーマに書いていきたい、と。国家も、個人と同じように記憶したり忘れたりするものなのか。［イ］、そこには重要な違いがあるのか。国家の記憶とは、いったいどんなものなのか。それはどこに保存されているのか。どうやって作られ、どう管理されているのか。(二)暴力の連鎖を断ち切り、社会が混乱と戦争のうちに崩壊していくのを阻止するためには、忘れる以外にないという状況もありうるのか。としても、意図的な健忘症とザセツ[c]した正義を地盤として、その上にほんとうに自由で安定した国家を築くことなどできるのか。私はそういうことについて書く方法を見つけたいが、残念ながら、いまのところどうやっていいかわからずにいる……。私の耳に、そんなことを質問者に答えている自分の声が聞こえてきました。

（中略）

私の世代はともすると楽観主義に傾きがちです。ですが、それは当然のことでしょう。全体主義がはびこり、民族抹殺など、歴史上類を見ない大虐殺が横行していたヨーロッパを、年上の世代が見事に変身させるのを見てきましたから。結果、ヨーロッパは国境さえほぼなくし、友好関係に生きる自由民主主義の地という、誰もがうらやむ場所に変わりました。世界中の旧植民地帝国と、それを支えていた忌むべき思想が崩壊するのも見てきました。フェミニズムやゲイライツが進展し、人種差別との戦いが大きく前進するのを見てきました。資本主義と共産主義の思想的・軍事的ショウトツ[d]を背景にして育った私たちは、そのショウトツがハッピーエンド――と多くの人々が信じた結末――を迎えるのも目撃しました。

しかし、いま振り返ってみると、ベルリンの壁が崩壊して以降、私たちは(三)うぬぼれの時代、機会喪失の時代に入っていたのか

もしれません。富と機会をめぐって、国内にも国家間にも大きな不平等が広がるのを見過ごしてしまいました。とりわけ、二〇〇三年には大失敗に終わったイラク侵攻がありましたし、二〇〇八年の経済恐慌以後には、長期間にわたる強制された緊縮政策によって庶民が苦しみました。極右思想や部族的ナショナリズムが跋扈(ばっこ)する現在は、それらの結果として存在します。人種差別が――伝統的な形でも、売り込みやすい現代的な形でも――ふたたび勢いを盛り返す気配です。いま、(四)埋もれていたモンスターのように、文明社会の大通りの下でうごめきはじめています。一方、私たちを一致団結させられる進歩的な大義は、まだ見えてきていません。西欧の裕福な民主主義国家でさえ、人々は分裂し、いくつもの敵対的陣営に分かれて、資力や権力を争い合っています。

科学技術や医療の分野で従来の壁を破る発見が相次ぎ、そこから派生するキョウイ(E)の数々が、すぐそこまでやって来ています。いや、もう到着しているでしょうか。CRISPR のような新しい遺伝子編集技術が編み出され、人工知能やロボット技術にも大きな進展があります。それは人命救助というすばらしい利益をもたらしてくれますが、同時に、アパルトヘイトにも似た野蛮な能力主義社会を出現させ、いまはまだエリートとみなされている専門職の人々をも巻き込む、大量失業時代を招くかもしれません。

六〇歳を超えた私は、いまかすむ目をこすりながら見定めようとしています。昨日までその存在にすら気づかなかった世界の輪郭はどんなでしょうか。それはまだ霧の中にあってぼんやりしています。知的に疲弊した世代の疲弊した作家である私は、この未知の世界をじっと見据えるのに必要なエネルギーを見つけられるでしょうか。社会が巨大な変化に適応しようとするとき、議論や争いや戦いが起こります。(五)そんな争いに新しい見方を与え、感情をともなわせるための一助となる何かが、私にまだ残されているでしょうか。

私は投げ出さず、最善を尽くさなければならないでしょう。［ウ］、文学は重要であると――この困難な地平を渡っていくためにはいっそう重要であると――私は信じているからです。若い世代の作家が頼りです。若い人々が私たちに閃(ひらめ)きを与え、導いてくれることを願っています。これは彼らの時代です。来るべき世界について、私にはない知識と本能を備えています。本、映画、テレビ、演劇のどの分野にも、冒険心に富んだすばらしい才能が――四〇代、三〇代、二〇代の男女が――ひしめい

ています。私は楽観的です。楽観的であってならない理由がありません。

最後に一つの呼びかけを――僭越ながらノーベル賞受賞者からの呼びかけを――お許しください。この世界の全体を正すことは困難です。ならば、せめて本を読み、書き、出版し、推薦し、批判し、授賞しつづけられるよう、私たちの住むこの「文学」という小さな一角だけでも、維持発展させていきましょう。不確かな未来に私たちが何か意味ある役割を果たしていくつもりなら――今日と明日の作家から、それぞれのベストを引き出そうと願うなら――私たちはもっと多様にならなければなりません。(六)私の言う「多様」の意味は二つです。

第一に、共通の文学的世界を広げていくことです。先進国のエリート文化という居心地のいい枠内にとどまらず、外からの声を取り込むことです。未知の文学をもつ文化を積極的に探し、そこから宝石を掘り出してくることです。それは遠くの国にいる作家かもしれませんし、同じ町内の作家かもしれません。第二に、よい文学の定義です。何がすぐれた文学かを考えるとき、あまりに狭い保守的な議論は避けるよう十分な注意が必要です。次世代の作家は、ありとあらゆる新しい表現方法で――ときには頭が混乱するような方法で――重要な話、すばらしい話を語ろうとするでしょう。とくにジャンルと様式については、心をオープンに保ち、現れてくる最良のものを祝福し、育まなければなりません。亀裂が危険なほど拡大している時代だからこそ、耳を澄ませる必要があります。よい作品を読むことで、障壁が打ち破られます。その過程で新しい思想が現れ、スケールの大きな人道的構想が練られて、私たちの結集を促すかもしれません。

（カズオ・イシグロ著、土屋政雄訳『特急二十世紀の夜と、いくつかの小さなブレークスルー』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　イブツ

①イブツが混入していた　②イシツブツ係
③イジン伝を読む　④イソウ幾何学
⑤リュウイ点を示す

1

B　セキム

①コセキ制度　②セキジが上がる
③ジョウセキ通りの一手　④ジュウセキを担う
⑤ソクセキをのこす

2

C　ザセツ

①セツドある対応　②リンセツした地域
③シンセツを唱える　④フセツされた土管
⑤ウセツ車線

3

D　ショウトツ

①ショウガイ物競走　②ショウゲキを受ける
③ショウジン料理　④ソショウに勝つ
⑤ショウビョウ兵

4

E　キョウイ

①キョウタンの事件　②キョウハク状
③キョウリョク金　④キョウダイの関係
⑤キョウシュウを抱く

5

問二　空欄 ア ・ イ ・ ウ に入る最も適当なものを、次の各群の①～⑥の中からそれぞれ一つずつ選べ。

6

ア
①そして　②しかし　③したがって
④それとも　⑤なぜなら　⑥だから

7

イ
①そして　②しかし　③したがって
④それとも　⑤なぜなら　⑥だから

8

ウ
①そして　②しかし　③したがって
④それとも　⑤なぜなら　⑥だから

問三　傍線部（一）「私には、その悩みがもっと大きなジレンマの暗喩のように聞こえました」とあるが、「もっと大きなジレンマ」の内容として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ

9

①ガス室跡の瓦礫化を防ぐためにガラスのドームで覆うべきか、朽ち果てるのに任せるべきかということ。
②ドイツ軍の爆破した施設の跡を博物館として保存するのか、自然に消え去るのを待つべきかということ。
③歴史の悪と苦痛の記憶を保存のために展示物にして良いのか、それとも忘れてしまうべきかということ。
④戦争の記憶を保存する努力をするべきか、それとも未来のために忘れ去られるのに任せるべきかということ。

問四　傍線部（二）「暴力の連鎖を断ち切り、社会が混乱と戦争のうちに崩壊していくのを阻止するためには、忘れる以外にないという状況もありうるのか」とあるが、筆者の問いかけの説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。　10

①国家や共同体の安定のために、これまで保管されてきた文書記録を捨て去ることが許されるのかということ。
②国家や共同体の崩壊をもたらすような記憶ならば、国民がみな積極的に忘れることが許されるのかということ。
③国家や共同体が安定して存続するためならば、記憶を保管せず忘れてしまうことが許されるのかということ。
④国家や共同体が他国の暴力を受けないためならば、正しい権力の行使を怠ることが許されるのかということ。

問五　傍線部（三）「うぬぼれの時代、機会喪失の時代」とあるが、具体的にはどういうことか、本文の説明として不適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。　11

①国内にも国家間にも経済的な不平等が広がっている時代
②経済恐慌によってもたらされた強制的な緊縮財政の時代
③極右思想や部族的ナショナリズムが力を失うような時代
④西欧の民主主義国家でさえ人々が敵対して富を争う時代

問六　傍線部（四）「埋もれていたモンスターのように、文明社会の大通りの下でうごめきはじめています」とあるが、どのようなことをたとえているのか、説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

12

①原因不明の大きな不平等や戦争の結果、人々が苦しめられるという状況
②極端な思想が宣伝されるが、文明社会の人々がそれを忌み嫌っているという様子
③人種差別のような克服したはずの風潮が、人々を捉え始めているという気配
④進歩的な文明社会でさえ、人々が分裂し敵対的陣営に分かれて争っている状態

問七　傍線部（五）「そんな争いに新しい見方を与え、感情をともなわせるための一助となる何か」とあるが、どういうことか。本文の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

13

①科学技術や医療の分野での新しい発見によってもたらされる、新しいものの見方、考え方ということ。
②社会が巨大な変化に適応するための争いに向き合い、人々を納得させる新たな世界の見方ということ。
③昨日までその存在にすら気づかなかった世界の輪郭を捉え、見つけ出すためのエネルギーということ。
④議論や争いや戦いに疲弊した世界を忘れ、新しい感情を見出す助けとなるための文学作品ということ。

問八　傍線部（六）「私の言う「多様」の意味は二つです」とあるが、本文中の「多様」とはどういうことか。説明として適当なものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

14・15

①先進国のエリート文化を否定し、他国の文化を作品に取り入れること。
②従来の文化の枠を越えて、未知の文化を探求すること。
③未知の文学を持った文化を探し、文学の枠組みを広げること。
④よい文学という定義についての議論を避けること。
⑤文学の新しいジャンルや表現方法について広い視野で捉えること。
⑥よい文学作品を読み、思想の障壁を破るということ。

問九　本文の内容と合致するものを、次の①～⑥の中から二つ選べ。

16・17

①筆者は、物語を公に語る者として、両親の世代の記憶と教訓を次世代に伝える重要性を感じている。
②筆者は、東京での講演で、忘れることと記憶することの間で葛藤する人物の物語を書いていきたいと答えた。
③筆者は、科学技術や医療の分野での従来の壁を破る発見について、すばらしい利益をもたらすものと称賛している。
④筆者は、文学は困難な地平を渡っていくために重要であると信じ、若い世代の作家に期待を寄せている。
⑤筆者は、ノーベル文学賞受賞者としての自分には、世界の全体を正すことは出来ないとして絶望している。
⑥筆者は、亀裂が拡大している時代にこそ、新しい思想が現れ、自分たちの世代の引退を促すと考えている。

第二問　次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

読解力は、世の中のさまざまなものごとや他者とのコミュニケーションの「場」を正しく理解する力ですので、大人の場合には仕事に直結して役立つ力と言えるでしょう。

読解力を鍛えるために何をしたらよいのか。答えはシンプルです。まずは読解力のベースとなる、知識と教養を身につけましょう。

では知識と教養の違いとは、何でしょうか。

本や新聞、学校の授業などから得るものは、知識です。たとえば一問一答のクイズに即座に答えることができる人は、知識が豊富で「物知り」(a)です。ただし物知りイコール「教養のある人」とは限りません。物知りは、暗記力を駆使してものごとをバラバラに知っているだけなのです。

それらの知識を自分の言葉にして伝えられたり、知識と知識を結びつけて何らかの論理を作ったりと、自由自在に駆使できるようになって初めて、その人は教養のある人だと言えるでしょう。

この原稿を執筆している二〇二〇年夏、新型コロナウイルスはなおも日本や世界で猛威を振るっています。このウイルスに関して、さまざまなデマがネット上で飛び交いました。(一)私も三月に知人から、「新型コロナウイルスは熱に弱いので、三六度のお湯を飲めば体内に入ったウイルスも死滅させることができるそうですよ」というメールをもらいました。

その人は善意で連絡をくれたのですが、これは完全なデマですね。三六度のお湯を飲むだけでウイルスが死滅（正確には不活性化）するのであれば、人間の体温は約三六度ですから、ウイルスは人間の体内に入った瞬間に死滅するはずです。しかしこの時点で、世界中で多くの人が、残念ながら新型コロナウイルスの影響で亡くなっていました。

ウイルスが熱に弱いのは確かですし、人がときに四〇度近い高熱を出すのは、免疫細胞がその熱でウイルスの不活性化を試みるためです。［a］肺や感染する細胞ひとつひとつにお湯を流し込むことはできないので、お湯を飲んでウイルスを死滅さ

せることは不可能です。少し考えれば、なんだか怪しい話だな、と気づくことができるでしょう。これがまさに、「知識が教養になっていない」例です。

「人間の体温は三六度」「肺に水を流し込むことはできない」という学校で習うような知識があっても、それがとっさに出てこない人が実際には数多くいるのです。しかしあとからじっくりと考えてみれば、これはおかしな話だと誰しも気づけたはずです。これがつまり知識の運用力、すなわち教養があるかないかの境目と言えます。

知識は常に活用していきましょう。そうしておかないと錆びついてしまい、いざというときに出てこなくなってしまいます。

さらにこのコロナ禍をきっかけに、ウイルスについて勉強しなおしてみるとなおいいでしょう。たとえばウイルスは、遺伝子がタンパク質の殻でくるまれただけの存在です。石けんを使って手を洗うと、そのタンパク質を破壊し溶かすことができます。

[b] 石けんで手を洗うことが大事なんだ、と理解できるようになります。

また細菌は細胞膜を持っていますが、ウイルスは細胞膜を持っていません。抗生物質には細胞膜を破壊する働きがあるため、細菌には効きますが、ウイルスには効かないのです。

ウイルスに効く「抗ウイルス薬」はまだ少なく、インフルエンザやヒト免疫不全ウイルス（ＨＩＶ）、Ｂ型・Ｃ型肝炎の薬といった限られたものしかありません。そのため新型コロナウイルスをはじめウイルス性の病気の多くは、症状を抑えるための「対症リョウホウ」という処置を行うことはありますが、基本的には体に備わっている免疫力で戦うしかありません。

こうして [ア] な知識を得つつ、ひとつひとつの知識についてつながりを持って理解できることこそが、知識の運用力、すなわち教養です。世間のさまざまなニュースを読み解く力がついていくのです。

「私には教養がないんです」と言う人がいますが、本当にそうでしょうか。義務教育である小・中学校、さらに日本では九九％の人が進学する高校で、誰しも基礎的な知識は身につけているはずです。知識はあるけれども、その運用力が欠けているため「教養がない」と感じてしまっているだけなのです。

学校で得た知識を定期テストや受験に使うだけで終わらせず、大人になってからも折に触れて振り返り、生活に応用していくこ

とで、教養は身につけることができます。さらには学び続けていくことで、教養はどんどん鍛えていくことができるのです。

知識を教養に変えていく方法は、たとえるならば、紀元前から人類が連綿(b)と続けてきた酒造りの工程と似ています。ブドウをいっぱい集めて溜めておくと、ブドウに含まれる糖が発酵してワインになります。米は水と麹菌とともに発酵させると日本酒になります。これと同じく、知識がたくさん溜まり発酵が進めば、「教養」になるということです。

ただし、ただ溜めておくだけではお酒も腐ります。発酵と腐敗は紙一重なのです。そこで折々に「かき混ぜる」という作業が大事になります。日本酒造りでは「櫂入れ」という工程で酒母やもろみをかき混ぜ、発酵を促します。

知識も、持っている知識をただそのまま置いておくだけでは、結局腐ってしまいます。ときどき棚卸しをしたり、どんな知識を持っていたかなと振り返って使う、つまり知識をひたすら蓄積しながら、ときどきそれをかき混ぜることで、教養となっていくのです。

最近私が「知識をかき混ぜた」(二)経験をお話ししましょう。アメリカと中国の関係が急激に悪化してきている近年のジョウセイ(B)に関して、アメリカの政治学者が、これを「トウキュディデスの罠」(三)と表現しているのを聞いて、考えたことです。

トウキュディデスの罠とは、古代ギリシャのトウキュディデスという学者が、『歴史』(小西晴雄訳、ちくま学芸文庫)という著書の中で「ペロポネソス戦争(紀元前四三一年〜前四〇四年)が起きたのは、スパルタという都市国家(ポリス)が、急激に成長する新興の都市国家・アテナイに立場が脅かされることを恐れたためだ」と書いたことに由来した言葉です。既存勢力が新興勢力に対し不安を募らせると戦争が起こるということで、スパルタとアテナイの関係が現在のアメリカと中国の関係にたとえられていました。

[c] 一方で、「スパルタ式教育」という言葉があるように、スパルタは軍国主義的な体制で民主主義のかけらもない都市国家でした。アテナイは民主主義を初めて実現した民主国家です。

そう考えると、現代における「トウキュディデスの罠」は、民主大国アメリカが急激に成長するドクサイ(c)国家中国に地位を脅かされる、という逆バージョンになっているのです。逆バージョンのときには何が起きるのだろうか、などと思考をめぐらせてみま

した。

［ d ］アテナイでは前四二九年に将軍ペリクレスが死去した後、「デマゴーゴス」と呼ばれる扇動政治家が現れ、好戦的な主張で民衆を煽ったことで民主政治が堕落し、ついにはペロポネソス戦争に敗北、衰退しました。民衆を煽るという点は某大統領を彷彿とさせる気もしますね。デマゴーゴスは「デマ」という言葉の語源でもあります。

こういう作業が、「知識をかき混ぜる」ということです。今のアメリカと中国の対立を、［ イ ］な観点から見てみたり、人間というのはトゥキュディデスの時代から同じようなことをくり返しているのだなと考えてみたりするのです。改めてトゥキュディデスの『歴史』を読もうとさっそく購入しました。こうして知識を広げ、教養を深めていくのだと思います。

あるいは、立命館アジア太平洋大学（ＡＰＵ、大分県別府市）学長の出口治明[四]さんが、こういう新型コロナウイルスが流行しているときにこそ『デカメロン』（ジョヴァンニ・ボッカッチョ、平川祐弘訳、河出文庫）を読むべきだとおっしゃっていました。私も実はそれを聞く前にちょうど『デカメロン』を購入していたところでした。

『デカメロン』は、ペストが蔓延する一四世紀のイタリア・フィレンツェが舞台です。ペストの感染を逃れようとした男女一〇人が郊外の別荘に逃げ込み、暇を持てあましてそれぞれとっておきのネタを一〇話ずつ話していく、一〇〇の物語です。デカメロンとはギリシャ語の「一〇日」に由来しています。まさに感染症によるジ[D]ジュク生活、ステイホームせざるを得なくなった人たちの物語なのです。

これを読むと、当時の中世ヨーロッパではカトリック教会が絶大な力を持っていたはずなのに、教会の神父さんたちをおちょくって笑い飛ばすといった話がたくさん出てきます。ペストが拡大しヨーロッパの人口の三分の一が亡くなる中で、キリスト教の権威が落ちてきていたことがよくわかります。結果的にこのペストが、一五一七年マルティン・ルターによって始まる宗教改革のソ[E]ジを作りました。

他にも『デカメロン』には、いわゆる男女の艶笑話、お色気話がこれまたたくさん出てきます。今読むと大したことはない内容ですが、日本では戦前まで、何度翻訳されても猥褻本とされて発禁となっていました。

これらの艶笑話からは、キリスト教の厳格な生き方から離れて、人間としてのいろいろな喜びを追求している当時の人々の姿がわかります。これこそが一四世紀から一六世紀にイタリアを中心として花開いた「ルネサンス」に発展します。歴史が大きく変わろうとする様子が『デカメロン』という小説に結実しています。そのため出口さんは『デカメロン』を勧めているのです。

これがつまり、知識がきっかけになり教養になっていくということです。溜めた知識は折々に改めておさらいをし、本を読み直したり周辺知識を調べ直したりすることで、応用できるようになるということです。

（池上彰『社会に出るあなたに伝えたい　なぜ、読解力が必要なのか？』による）

問一　傍線部A・B・C・D・Eと同じ漢字を含むものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つずつ選べ。

A　リョウホウ

①土地をリョウユウする　②ドウリョウを介抱する　③ゼンリョウな医者　④人々をミリョウする景色　⑤荒リョウジを施す

18

B　ジョウセイ

①温度をコウジョウに保つ　②人員にヨジョウが出る　③キジョウの空論に終わる　④ブームにビンジョウする　⑤国会にチンジョウする

19

C　ドクサイ

①松のボンサイ　②デパートのサイジ場　③サイホウの道具　④レイサイ企業で働く　⑤サイケンに投資する

20

D　ジシュク

①シュクガンを果たす　②セイシュクな会場　③紳士とシュクジョ　④シュクハイをあげる　⑤社会のシュクズ

21

E　ソジ

①シッソな暮らし　②二刀流のガンソ　③ソゼイを取り立てる　④友人とソエンになる　⑤原告が提出したソジョウ

22

問二　空欄 ア ― イ に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。　23

ア ― イ

①医学的―科学的　②基礎的―歴史的
③断片的―娯楽的　④抽象的―学術的
⑤専門的―文化的

問三　空欄 a ― b ・ c ― d に入る語の組み合わせとして最も適当なものを、次の各群の①～⑤の中からそれぞれ一つ選べ。

a ― b　24

①また―そのかわり　②そして―すなわち
③けれども―だから　④従って―ならば
⑤とはいえ―加えて

c ― d　25

①そして―ともあれ　②ただし―ところで
③とはいえ―まさに　④しかし―ちなみに
⑤また―こうして

問四　傍線部（a）「物知り」とあるが、この語と同じ意味を表す四字熟語を、次の①～⑤の中から一つ選べ。　26

①博覧強記　②博覧経記　③博覧教記
④博覧共記　⑤博覧興記

問五　傍線部（b）「連綿と」とあるが、その意味として最も適当なものを、次の①～⑤の中から一つ選べ。　27

①熱心に　②黙々と　③断続的に
④各所で　⑤絶え間なく

問六　傍線部（一）「私も三月に知人から、「新型コロナウイルスは熱に弱いので、三六度のお湯を飲めば体内に入ったウイルスも死滅させることができるそうですよ」というメールをもらいました」とあるが、著者がこのエピソードを紹介したのはなぜか。その理由としてもっとも適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。　28

①たとえ善意であっても、出どころのはっきりしない説を他者に広めることによってデマが拡散し、社会全体が混乱に陥ってしまう危険性があると示したかったため。
②未知の領域に関することでも、学校で習う知識を活用しさえすれば有効な仮説を立てることができ、世の人々の危機回避に役立つこともあると示したかったため。
③学校で習う知識をふまえて考えれば、世間に流布している噂の是非を見極めることも可能であり、そうした知識運用の在り方に意味があると示したかったため。
④危機的状況の中でまことしやかなデマを書いたメールが出回るのは教養のない人間が多いことの証であり、それが日本の弱みであると示したかったため。

問七　傍線部（二）「知識をかき混ぜた」とあるが、その具体例としてふさわしくないものを、次の①～④の中から一つ選べ。　29

①高校生のAさんは化学の授業で習った公式を何度も書いて完璧に覚えた上、さまざまな応用問題を解いて理解度を高め、定期テストではクラスで一番のすばらしい成績をおさめることができた。

②大学生のBさんは日本史の教科書に名前が出てきた戦国武将がゲームに出てきたことに興味を持ち、その武将について調べた結果、ゲーム中に多くの歴史パロディがあると気づけるようになった。

③主婦のCさんは子どもが入学する幼稚園の候補を夫とリサーチする中で「孟母三遷」の故事が頭に浮かび、わが子の学習環境を気にするのは現代の日本に限らないことだと面白く思った。

④会社員のDさんは旅行でドイツのベルリンを観光した際、学生時代に国語の授業で読んだ『舞姫』にも同じ土地が出てきたことを思い出し、帰国後に『舞姫』を読み直した。

問八　傍線部（三）「トゥキュディデスの罠」とあるが、この言葉の説明として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。　30

①トゥキュディデスという学者が、著書の中でペロポネソス戦争の経緯を紹介し、スパルタがアテナイを駆逐するために仕掛けた戦略について詳述したことに由来した言葉

②トゥキュディデスという学者が、著書の中でペロポネソス戦争の背景に注目し、スパルタがアテナイの台頭に危機感を持ったのが戦の要因だと述べたことに由来した言葉

③トゥキュディデスという学者が、著書の中でペロポネソス戦争の普遍性を分析し、スパルタとアテナイのような対立が国や時代を問わず生じうると指摘したことに由来した言葉

④トゥキュディデスという学者が、著書の中でペロポネソス戦争の起因に言及し、スパルタが新興勢力のアテナイを侮ったことが事の発端だと分析したことに由来した言葉

問九　傍線部（四）「出口治明さんが、こういう新型コロナウイルスが流行しているときにこそ『デカメロン』（ジョヴァンニ・ボッカッチョ、平川祐弘訳、河出文庫）を読むべきだとおっしゃっていました」とあるが、その理由として最も適当なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

31

①『デカメロン』には、ペストを避けようと郊外の別荘に避難した人々が滑稽な話をして楽しむ様子が描かれており、その語りを順番に読み進める中で、新型コロナウイルスに不安を抱く現代人もまた「明るさを失わずに生きていこう」という未来への希望を見出すことができるから。

②『デカメロン』は、フィレンツェにおけるペストの流行を背景としてキリスト教の権威が失われていく様を、一〇人の男女が語っていく実録であり、そこに見られる風刺の精神は、新型コロナウイルスに対して有効な策を打ち出すことができない現代の政治家たちへも通じるから。

③『デカメロン』は、ペストが流行する中一つの別荘に集まった男女が面白い話を披露していくという枠組みを持つが、その艶笑話の数々は戦前の日本では出版禁止となっていたものであり、それらを読むことで現代の出版事情における寛容性のありがたみを実感することができるから。

④『デカメロン』に描かれた「ペストを避け郊外の別荘に入った人々」の姿が新型コロナウイルスの危機にさらされる現代人の姿と重なることに加え、作中人物の話を通して当時の人々の意識が大きく浮かび上がり、歴史の変動というテーマについても目を向けさせてくれるから。

問十　本文の内容と合致するものを、次の①～④の中から一つ選べ。　32

①ワインや日本酒を作る際、気温や湿度などの環境によって適切に発酵するか否かが決まってしまうのと同じく、習った知識が活用されるか否かは個人をとりまく環境によるところが大きい。

②「読解力」とは文章を通して著者の意図を理解することであるが、それを実生活にも応用し個々の事象を注意深く観察する中で世の中のニュースを正しく読み解く力も身につく。

③「デマ」という言葉は、紀元前の都市国家アテナイに実在した「デマゴーゴス」という政治家が好戦的な主張で民衆を扇動し、それが原因で国家が衰退に至ったことを語源としている。

④現代ではウイルス性の病気は抗生物質によって治すことができるが、中世ヨーロッパで流行したペストには有効な対応策がなかったため多くの人が死亡し、それが宗教改革の引き金となった。